

「差別の哲学入門」

池田喬、堀田義太郎著

(アルパカ)

差別がいけないことは誰もが知っている。でも差別とはいったい何なのか。いざ考え始めると、途端に迷宮に入り込んだ思いにとられる。企業などが女性を優先的に雇うのは男性への差別では？ ヘイトスピーチは「表現の自由」じゃないの？ 思考はぐるぐる回り続け、なかなか出口にたどり着かない。

哲学と倫理学を専門とする著者たちは、そんな難問を丁寧に解きほぐす。

女性や黒人などこれまで差別されてきた人々を優遇する「アファーマティブ・アクション」については、米国の大学入試における黒人優先を巡り、成績優秀にもかかわらず落第した白人が訴えた事例を解説する。入試制度

考えない
||
恵まれた立場？

ガクシヤ本

が白人への差別と捉えられることは認めつつ、過去の黒人差別への補償と公平で合理的未来を実現するためには正当化できると説明する。

ヘイトスピーチについては、言葉も暴力などと同じ「行為」と捉えられることを指摘。行為である限り他人に危害を加えないことが求められるとして、「既存の差別を前提にして、その力を借りて差別を扇動」するヘイトスピーチを禁止する意義を解説する。

一方で著者たちは、アファーマティブ・アクションへの批判や、ヘイトスピーチの禁止に反対する立場についても紙幅を割く。差別



を巡る議論の全体的な構造を正確につかみだそうとする過程からは、哲学的思考の持つしなやかさが感じられる。

本書後半には一層複雑な問題として、白人少年が恋人の黒人に「肌の色は見ていないよ」と語り掛けることが差別につながるエピソードが説明される。肌の色を無視することは「彼女が誇りとする過程や文化にも関心がない」という意味を持つ。肌の色を考えずに済ませられるのは、それだけ恵まれた立場であることを表すのだ。白人と黒人の間に起こった話は遠いことのように思えるかもしれないが、在日コリアンも同じような経験をしてきたことは容易に想像できる。

本書を読み終えても、差別問題という迷宮の出口が見つかるわけではない。だが、自分がいかに無知だったかははっきりする。「無知の知」とは、まさに哲学の目的とも言える。

(広瀬一隆)